

ルカ 2 章 41-52 節 「家族として」

今日の聖書箇所は、唯一イエスさまが幼い時のことが記されている箇所です。男の子は13歳になる年に、成人式を迎えます。ユダヤの成人男子は、三大祭りの時には、エルサレム神殿に参拝することが命じられていました。特に過越祭は大事な祭りとなされ、マリアとヨセフもそういう慣習に従ってエルサレム神殿に参詣しました。そして帰りの出来事です。ヨセフとマリアは、イエスがいなくなっても気付きません。両親はあわてて、エルサレムに戻ってイエスを捜します。三日後にやっと神殿の境内でイエスを発見します。この三日間の両親の気持ちは大変だったでしょう。一方イエスは、律法の教師たちの話を聞いたり、質問したりしていました。

マリアは安堵のあまりイエスを叱ります。するとイエスは答えます。「どうして私を捜したのですか。私が自分の父の家にいることは当たり前だということを知らなかったのですか」(2:49)。この箇所を読むと、イエスさまのひどい言葉に、驚かされます。「自分の父の家にいるのは当たり前だ」との言葉は、父ヨセフにとってきつい言葉だったことでしょう。イエスさまはナザレで、「この人はマリアの息子ではないか」(マルコ 5:3)と呼ばれています。父の名で呼ばれることが当然の社会で、母の名で呼ばれる。そこにはイエスは「私生児」ではないかとの推測が含まれているのでしょう。その中で過ごしていた父ヨセフもまた、イエスへの接し方に悩んでいたことでしょう。イエスさまはヨセフを父として立てながらも、本当の父を求めておられた。ナザレの家が自分の本当の家ではないという違和感を持っておられた。そのイエスが本当の父を神殿で見出したのではないのでしょうか。

一体、「家族」とは何でしょう。イエスさまの少年時代のエピソードは、両親の庇護のもとで、イエスさまが「知恵が増し、背丈も伸び、神と人ともに愛された」(2:52)少年時代を過ごされたことを示しますが、一方で、少年イエスが両親の考えを超えた行動をし、両親にはそれが理解できないという話でもあります。分かり合うことの難しい家族。このすれ違いがこの家族にすらあったのです。そしてイエスさまが成長された後、マルコによる福音書 3:33-35 には、イエスさまが「私の母、私の兄弟とはだれか」と説いている場面が書かれています。イエスさまは実の家族に対して、「私はその人たちを知らない」と言われました。そして「見なさい。ここに私の母、私の兄弟がいる。神の御心を行う人こそ、私の兄弟、姉妹、また母なのだ」(3:35)と続けました。血の繋がった者が家族ではなく、信仰で繋がった家族、「神の家族」がここにいると宣言されたのです。

イエスさまは十字架で死なれますが、神さまはイエスさまを復活させられました。この復活を通して、イエスこそ神の子と信じる群が起こされ、教会を形成して行き、共に住み、家族として一緒に暮ら始めます。十字架と復活が新しい家族を形成する、それこそが神の国のしるしなのです。「神の御心を行う人こそ、私の兄弟、姉妹、また母なのだ」という御言葉が通用する共同体であり、罪を犯した者、一人暮らしで孤独に悩む人も招かれ、世の願望が打ち砕かれる所です。どのような方も招かれ、受け入れられる場所が教会です。神の家族として招かれた私たち。どうか、信仰でつながった者として、新年にあたり、その事を共に覚えたいと願います。